



ビリーと アナグマと 虫のお話

春も終わりに近づいたある日の夕食の時間です。「虫の日は、すごく楽しくなりそうだよ！ただ、アナグマのスマグルがそれを台無しにしなければいいんだけど。」ウサギのビリーが、お母さんウサギとお父さんウサギに話しています。

「虫の日には、何をやるの？」お母さんがたずねました。

「あのね、すごく楽しいんだ！ぼく達、理科の時間に虫のことを勉強してるんだよね。それで、明日は森に行ってチームに分かれ、どのチームが一番たくさんの種類の虫をガラスびんに集められるか、競争するんだ。ただよくないのは、アナグマのスマグルがぼくのチームメイトだってことなんだよね。どうしてリーマス先生がぼくをスマグルとチームにしたのか、分かんないよ。虫の日は、絶対にアレックスと一っしょにやりたいて思ってたのに、スマグルと一っしょだなんて。」

「スマグルと一っしょなのが、どうしていけないんだい？」お父さんがたずねました。

「スマグルは、自分は何でも知ってるって思ってるんだ。だから、ぼくの言うことを聞いてくれないんだよ。おしつげがましくて、

いつも自分のやりたいようにやるんだ。」ビリーはふきげんそうに言いました。

お母さんがうなずいて言いました。「それは大変ね。順番にやろうって、言ってみた？それでうまくいくこともあるわよ。」

「分かってるよ。もう話したんだけど、聞いてくれないんだ。」

「まあ、うまくいこうさ。ほかの者達と一っしょにやっていくことを学ぶのは、とても大切なことだ。それが、自分とうまが合わないと思っている相手だったとしてもな。それは別として、明日の準備はもうできているのかい？」



「うん、できてるよ。何を探したらいいのかも、ちゃんと分かってるしね。」 ビリーは自信満々です。「昆虫には外骨格があって、体は三つの部分からできてるんだ。足は6本、触角が2本、そしてたいいていの昆虫には、2対の羽があるんだ。」

「そうだな。だが、羽が1対しかない昆虫もいる・・・」

「ハエなんかでしょ。そのくらい知ってるよ。」 ビリーはあきれた顔をしました。

すると、お母さんが言いました。「わたしがあなたの年だった時にはね、虫の日は大好きだったわ！ 他の子たちが思いつきもしなかったような場所を探したのよ。古い丸太をひっくり返してみたり・・・」

「どこを探したら一番いいのかくらい、もう分かってるよ。」

ビリーは、お母さんが話し終えないうちから言いました。だれかに教えてもらわなくても、虫の日についてはもう

じゅうぶん 十分知っていると 思っていたのです。ビリーは、友だちの だれよりも、さらには自分の 親よりも、自分の ほうがよく知っていると 思うことさえ ありました。

★★★

「ぼく、最高の虫を見付けられる場所、知ってるよ！」 ビリーがスモグルに話しています。リーマス先生のクラスを乗せたスクールバスが、森のはずれに着きました。今から1時間、みんなチームに分かれて、できるだけたくさんの種類の虫を集めるのです。

スモグルが言いました。「ぼくだって、知ってるよ。マガモ池のそばには、最高の昆虫を見付けられる場所があるんだ。」

「池だって？ そんなんじゃ、ぼくたち負けちゃうよ！ ぼく、ホントに最高の場所知ってるんだ！ 森の中でたくさん丸太が転がってる所。その下には、ムカデやミミズや、地をはう虫がいろいろいるはずだよ。」

「じゃあ、君はそっちに行けばいいよ。ぼくは、池の方に行くから！」

「だけどぼく達、チームでしょ・・・」

「じゃあ、いっしょに池に来たらいいじゃないか。」そう言いながら、スモグルはマガモ池の方に向かいました。「それに、ぼくは君よりも1か月年上だから、君のほうがぼくの言うことを聞くべきじゃないのかな。」

ビリーは、スモグルが池の方に歩いて行くのを少しの間見ていましたが、

(ようし、見てろよ。) そう思いながら、森の方へ急ぎ足で歩いて行きました。

丸太をひっくり返してその下にいる昆虫を見つけるのは、思っていたほど簡単ではありませんでした。丸太を一人で持ち上げるのは、一苦労でした。協力して丸太を持ち上げている他のチームを見ると、ビリーは思わず、スモグルのほうこそ、勝手に一人で行かないでビリーといっしょに来るべきだったんだ、とつぶやきました。何度も何度もやって、ビリーはやっと、丸太をひっくり返すことができました。けれども、ひっくり返すまでに長い時間がかかったので、その間にほとんどの昆虫はどこかへ逃げて行ってしまいました。



1時間はあっという間に過ぎ去り、リーマス先生が合図のホイッスルを吹きました。そして、丸太をひっくり返した生徒達は、それを元通りにするようにと言いました。他のチームのびんはみんな、もぞもぞと動き回る昆虫でいっぱいでした。けれども、ビリーは何とかしてやっと1匹のムカデをつかまえただけでした。(何てことだ!)と思っていると、スモグルがバスにもどって来るのが見えました。スモグルも、うれしそうな顔をしてはいません。スモグルのびんにも、トンボが1匹入っているだけでした。

学校へ帰るとちゅうのバスの中で、スモグルがビリーにささやきました。「ぼく達が負けたら、君のせいだからね。ものすごくたくさん昆虫がいて、何からつかまえたらいいのか分からなかったんだ。それで、結局1匹しかつかまえられなかったんだ。」

「スモグルだって、もしぼくといっしょに来て、丸太をひっくり返すのを手伝ってくれていたら、すごくたくさんの虫をつかまえられたんだぞ。」ビリーも、かっかしながら言い返しました。

その後は、ビリーもスモグルも、バスが学校に着くまで、ずっとおたがい口もききませんでした。

★★★



その日、ビリーは とても がっかりした 様子で 家に 帰りました。

「虫の日は、ひっちゃかめっちゃかだったよ！ 明日は、学校に行きたくないな。」

「まあ、どうしたの、ビリー？」と、お母さんが たずねました。

「スモグルとぼくは、虫を たった 2匹しか つかまえられなかったんだ。アレックスとフィスクは、少なくとも 20匹は つかまえたのにね！ みんな、スモグルのせいさ！ スモグルは 自分が 何でも 知っていると 思っているから、人の話を 最後まで 聞こうと しないんだ。ぼくの 言うことなんか、全然 聞いてくれないんだよ。もしアレックスと いっしょだったら、絶対に 勝ってたのになあ。アレックスは、いつも ぼくの 話を 聞いてくれるし、頼むことを 何でも してくれるんだ。」

「確かに、アレックスは あなたの いい お友だちよね。母さんも、ちゃんと 話を 聞いてもらえなくて、何かを 言おうと している 時に 割りこまれたら、いい 気分は しないわ。だれでも、同じように 感じるんじゃないかしら。」 ビリーが 学校かばんを 置いて 上着を ぬぐのを 手伝いながら、お母さんが 言いました。

思わず、ビリーの 顔が 赤く なりました。きのう 夕食の 時に、自分が お母さんに 対して 取った 態度を 思い出したのです。

お母さんは 話を 続けました。「ビリー。スモグルも、今の あなたと 同じ 気持ちかもしれないわよ。もしあなたが 学校で 学んだことを お父さんや わたしに 話している 時に、『もう 知ってるよ』って 言われたら、どんな 気持ちが するかしら？」

「だけど、お父さんも お母さんも、そんなこと 言わないでしょ。」と ビリーが 言いました。

「もちろん、言わないわよ。だって、あなたを 愛しているもの。だから、知っている ことでも、あなたに 関心があるから、話を 聞くのよ。」

「そうか〜。分かったよ。」と、ビリーが 言いました。

「ねえ、ビリー。もしスモグルが 話している ことに 耳を 貸すなら、今まで 知らなかったような ことが 分かるかもしれないわよ。それに、たとえ もう 知っている ことだけだったとしても、ほかの 何かを 得られるかもしれないわ。」

「ほかの 何かって？」 ビリーが たずねました。

「お友だちよ。」 お母さんが 答えました。

★★★

つぎ ひ、ビリーと スモグルは いっしょに すわ っていました。かく 各チームは、じぶんたち 自分達たちがつかまえた むし はい 虫の 入った びんを まえ 前にして、それぞれの むし とくちょう 虫の特徴とつかまえた 場所をノートに 書きこんでいました。

さいしょ 最初に ろうか で あ 会った とき、スモグルは なに い 何も 言いませんでした。ビリーは、きのう かあ お母さんが、ともだち え 友達を 得られるかも しれないと 話していた ことを 考えていました。

きみ 君の トンボ、すてきだね。」と、ビリーが 言いました。

スモグルは おどろいて 言いました。「本当？ これ、めずらしい しゅるい 種類の トンボなんだよね。それで、こいつをつかまえようとして、すごく 時間がかかったんだ。トンボって、ヤゴの とき ちい さかな 小さな 魚をつかまえる ヤリみたいなのを も 持ってるって、知ってた？」

「ううん、し 知らなかったよ。」 ビリーは かんしん 感心して 言いました。

「トンボは か た 蚊を食べるよね。いぜん 以前 70cm も ある トンボの か せき み 化石が見つかったことがあるそうなんだけど、げんざい 現在でも、18cm も ある トンボが いるんだってさ！」



「うわあ！ それって、今日の発表会で話す？」

すると、急にスモグルの顔が曇りました。「そうだねえ……。ほかのみんなは、すごくたくさんの種類の虫をつかまえたからなあ……」

「だけど、トンボをつかまえた人はだれもいないよ！」 ビリーは得意そうに言いました。

「それも そうだね！」 そしてスモグルはためらいがちに言いました。「ねえ、ビリー。もし昨日、ぼく達 いっしょにやっていたら、勝っていたかもね。」

「来年は、いっしょにやったら勝とうよ。」と、ビリーが言いました。「だけど今年、最高に面白い資料を見つけたことでは一番さ！」

スモグルとビリーは、向き合ってにっこり笑いました。（それに今年、新しい友達もできたしね。）とビリーは思うのでした。

お
終
わ
り



文：R.A.ワターソン 絵：松岡陽子 デザイン：ロイ・エバンス

出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル "Billy and Friends: Billy, Badger, and Bugs"--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ ビリーと仲間達、子供のための物語、友情、問題を解決する